

セツルメント・ワーカーと優生学ワーカー Settlement Workers and Eugenic Workers

西 崎 緑

Midori NISHIZAKI

福祉社会教育講座

(平成17年9月30日受理)

抄録

Female college graduates in the early twentieth century struggled to develop their professional careers in the male chauvinistic society. Most of them found niches in the social work fields while a few of them became eugenic workers in order to pursue their scientific curiosity. This article examines the similarities between the settlement workers and eugenic workers. Both of them were motivated by progressivism and reformism, and tried to make poor families more organized, although their applications were quite different. The settlement workers welcomed the immigrants and tried to include them in the mainstream America while the eugenic workers tried to exclude them in order to conserve WASP culture.

はじめに

19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ経済は未曾有の発展を経験し、それに伴って大都市への人口集中が進んだ。とりわけ都市には南欧や東欧からの移民がスラムを形成したため、その不衛生な状態と犯罪の巣窟である様子を、行政担当者や知識人は、スラム住民の生活改良の必要を論じるようになった。合理性と実際性を重んじるアメリカ社会の人々は、都市計画、セツルメント、公衆衛生を普及し、また貧困者に対して、精神医学や心理学をベースとしたケースワークを行って社会適応を図ろうとした。

このような社会改良事業の中心となったのは、高学歴女性であった。彼女らは、宗教的動機と科学主義を併せ持つ世代であり、19世紀のヴィクトリア的父権主義から開放された自己を実現させる場を社会改良に求めた。やがて彼女らは、ソーシャルワーカーやセツルメント・ワーカーとなり、婦人参政権獲得運動、女性労働者の労働条件改善、最低賃金の確立、児童労働禁止、少年裁判所の設立、母親年金の実現などに向けての政治運動の核として活躍していく。

その一方で、社会の進歩を生産性の向上と結びつけ、優秀な遺伝子の獲得・保存へと向かう人々も現れた。イギリスで生まれた進化論は、その後優生学へと発展していき、20世紀初頭のアメリカでは、優生思想が驚異的な早さで一般社会に浸透していった。これは、多種多様な人々が集まるアメリカ社会においては、優生思想が実態として理解されやすかったこと、当時の急速な工業化が優秀な労働者を確保することによる生産性の向上を優先課題としていたことによる。科学主義を教育され、科学による人類の未来の改善を信じた

女性たちは、優生学ワーカーとして精神障害者や知的障害者、さらに無学で不道德な移民たちの子孫を社会から排除すべく活躍することとなる。

本稿では、同時期に高等教育を受けた女性たちが目指した、科学的手法によるアメリカ社会の改良への2つの道を辿ることにより、移民や生活困難な人々を社会に包摂するための試みと障害者や無学の人々を排除しようとした試みが一見相反する方向への取組に見えながら、実際には同根根であって、両者の間に共通基盤や相互関係があり得たことを述べる。

1. 女子大卒者の社会進出

19世紀後半、とりわけ南北戦争後には、女子の高等教育が盛んに行われるようになった。アメリカの大学で最初に女子を受け入れたのは、オハイオ州のオベリン大学（1837年）であった。しかし同時に受け入れが開始された黒人男性が白人男性と同じクラスで同様のカリキュラムを与えられたのに対して、女子は女性部で学ぶことを指示され、別のカリキュラム、女性のための学位を与えられた。当時、男子と全く同じ教育課程を与えることが躊躇された理由は、行き過ぎた高等教育や男子と同様のカリキュラムは、女性としての成長や役割、すなわち家庭における道徳的規範を守る存在としての女性や子どもを産み育てる存在としての女性の性質を阻害するものとして捉える者が多かったからである。その後、1870年までに、全米の大学の30パーセントが共学となったが、ハーバードやコロンビアなどの東部エリート大学では、ラドクリフやバーナードなどの女子校を男子校の姉妹校として併設する方式をとり、依然として男女別学は続いていた。ともあれ、1900年代初頭には、全米の大学の70パーセントが共学となり、学生数の30パーセントは女子が占めるようになった¹。

一方、19世紀には、女子のみの教育機関として、神学、文学、教育学等を専攻する女子大学も設立された。最初の女子大学は、1839年に設立されたジョージア女子大学であり、次いで1851年にはテネシー州にメアリ・シャープ大学が設立された。その後、西部や中西部では、1862年のモリル法によって新設された州立大学に女子の受け入れが始まった。しかし東部や南部の大学では、公私を問わず女子の受け入れ割合が定められ、女子の入学が制限されていた。そのため南北戦争後の1860年代から1930年代まで、女子大学の設立ブームが続き、東部では「7姉妹」と呼ばれる、バーナード（コロンビア大学）、プリン・モー、マウント・ホルヨーク、ラドクリフ（ハーバード大学）、スミス、ヴァッサー、ウェルズリー、南部では、ガウシャー、ソフィー・ニューコム、アグネス・スコットなどが設立された。この他、カトリック教会も1900～1930年までに女子大学19校を設立している²。

これらの女子大学では、男子校と同水準の教育を施すことを目指しただけでなく、実験科学や文学、さらに卒業時の就職を前提とした職業教育（選択制）をカリキュラムに取り入れていた。淑女教育で有名なマウント・ホルヨークと並ぶ古参女子大であるヴァッサーでも、19世紀末には本格的な学問教育が行われるようになった。他のウェルズリー、スミス、プリン・モーなどの新設女子大では、さらに進んで、政治学、社会科学、実験科学が教授された³。また当時としてはめずらしかった女性教授を採用したり、キリスト教社会主義者の教師が学生に「社会で活動する女性とは何か」を教えたりした。マウント・ホルヨーク、プリン・モー、スミスでは専門職養成教育や研究者養成のために、大学院を設けていた。こうした教育の結果、多くの卒業生がキャリアウーマンになり、彼女らは、その後も独身または少数の子どもしか持たず、社会的に活動的であり続けた。

この時期の大卒女子は、大学教育を受けた最初の世代であり、自らの才能を家庭生活に

活かすだけでは物足りなさを感じていた。しかし就職に当たって彼女らが直面した問題は、伝統的なホワイトカラーの職や専門職は男性に限定されていたことであった。また彼女らの親には、未だ女性が職業人として生きることには抵抗が強く残っていた。家庭こそが女性の生きる場所であるという考えと職業を両立させるために、彼女らは社会福祉関係の仕事に活路を見出した。ソーシャルワーカーやセツルメント・ワーカーなどの仕事は、貧困層や移民の家庭機能を強化したり、道徳的に社会改良をもたらすという意味で、家庭を守るという伝統的な社会的責務を全うしつつ、職業的自己を確立する新しい生き方であった。例えばニューイングランド地方の女子大学ヴェッサー、ウェルズリー、スミス、プリン・モア出身者・在学者が中心となって運営した大学セツルメント協会(The College Settlement Association)⁴は、1889年にニューヨークにセツルメントを開設して以来、数々のセツルメントの設立と運営にあたり、大卒女性たちの社会活動の登竜門となった。

一方この時期には、工業の発展とともに、優秀な労働力への関心が高まり、社会ダーウィニズムや遺伝子への関心が高まった時期でもあった。社会改良に向けられた科学的志向は、優秀な遺伝子集積による生産性の向上という考え方に結びついた。同時に社会的有害者の増加防止による社会の非生産性の排除にも結びついた。このような優生学的志向は、治療困難な難病者や更生困難な犯罪者などの個人や家系を、科学的手法を用いて見出し、その子孫を根絶することに向けられた。社会の発展と道徳的向上のために優生学ワーカーとなった彼女たちは、自らの仕事の正当性を信じて疑わなかった。社会的有害者の遺伝的家系を見出したり、心理テストによって知的能力の選別を行うには、科学を理解し、感情や迷信に支配されずに客観的観察ができる人間がその実践者となる必要があった。その担い手として大卒女性が動員されたのは自然なことであった。

2. セツルメント・ワーカー

(1) セツルメントの発生

進歩主義時代のセツルメントの特徴の1つは、その指導者に女性が多かったということである。1889年から1914年までの指導者は、5分の3が女性(うち9割が大学教育を受けた者)であった⁵。これらの女性たちが積極的にセツルメント運動に参加した理由は、前述のように女子大学の教育内容の変化にも原因があった。

アメリカにおけるセツルメントの発祥は、スタントン・コイト(1857-1944)⁶が1886年にニューヨークに設立した隣人組合(後の大学セツルメント)である。コイトは、ベルリン留学中の1885年にトインビー・ホールの活動を知り、1886年1月から3月までトインビー・ホールに滞在した。帰国後直ちに彼は、同様の活動を開始するべくニューヨークのイーストサイドの最も荒廃した地区に居を構えた。コイトは、まず約100戸からなるグループを単位組合として組織し、それらの組合の指導者会議での決定に基づいて、住民の自助努力によって社会改良を行うことを考えた。但しこの方式は定着せず、高等教育を受けた社会改良家が貧困地区に居住し、住民の生活を指導するという方式がセツルメントの主流となった。

1890年代になると、貧困や社会的不条理に対するキリスト教徒の個人的責任を問う社会的福音運動⁷が盛んになり、セツルメントの思想的基盤に織り込まれた。その旗手の一人、アンドーヴァー神学校(ボストン)のウィリアム・タッカーは、彼がトインビー・ホールに研修に行かせたロバート・ウッズ(1865-1925)を中心に、1891年アンドーヴァー・ハウス(後のサウス・エンド・ハウス)を設立した。このセツルメントは、公衆浴場や児童遊園

などを含め、ボストン地区のセツルメントの見本となり、多くの若い女性が協力を申し出た。ウッズやアルバート・ケネディ(1879-1968)（後にニューヨークの大学セツルメントに移る）は、1911年に200ヶ所以上のセツルメントを傘下に入れた「全米セツルメント連合」を設立し、社会調査や政治活動の協同化を図った。

ニューイングランドとは全く別に、しかし同時期に同じような動機で、中西部の都市シカゴでは、ジェーン・アダムズがハル・ハウスを設立した。1881年に大学を卒業した後、アダムズは、貧困地区での医療を志して医学校に入学した。しかし彼女はすぐに、健康上の理由から療養を余儀なくされ、学校時代の級友エレン・ゲイツ・スターを伴ってヨーロッパに滞在した。彼女らは、セツルメント設立への意欲を持って1888年トインビー・ホールを訪問し、サミュエル・バーネットと面会した。そして帰国後、1889年9月ついにシカゴにハル・ハウスを設立したのである⁸。ハル・ハウスは、地域社会、市、全米レベルでの社会改良をめざし、様々な調査活動⁹および委員会での証言などを行う傍ら、住民のために幅広い活動を行った¹⁰。

ハル・ハウスに続いて、シカゴでは1891年ノース・ウェスタン大学セツルメントが、社会的福音牧師であり社会改良家であるチャールズ・ゼプリンによって開設された。このセツルメントは、シカゴに居住する様々な民族間の相互交流を研究することを主目的にして設立され、その後1905年の小児保健向上キャンペーンなどの政治活動に熱心に取り組むセツルメントとして有名になった¹¹。これらの第一世代のセツルメントの指導者は、大学生をセツルメントの居住者として迎え、セツルメント・ワーカーとしての訓練を施し、第二世代を育てていった。

この他、都市の衛生状態を憂慮して、多くの看護職がセツルメントの建設や運営に参加した。その特色が濃く見られるセツルメントとしては、1893年にリリアン・ウォルト(1867-1940)によって開設されたヘンリー通りセツルメント（ニューヨーク）がある。ウォルトの活動の中心は訪問看護で、1913年には、92名の訪問看護師を抱え、貧困地区住民の訪問看護および健康相談にあたった。また1909年にはメトロポリタン生命保険会社に工場労働者の医療保険の給付に看護サービスを加えさせ、以後1200の都市や町で同様のサービスが給付に加わった。1912年には、赤十字に保健サービスを加えさせ、最終的には農村保健活動として知られるようになるサービスに発展させた¹²。

（2）セツルメントとセツルメント・ワーカーの活動

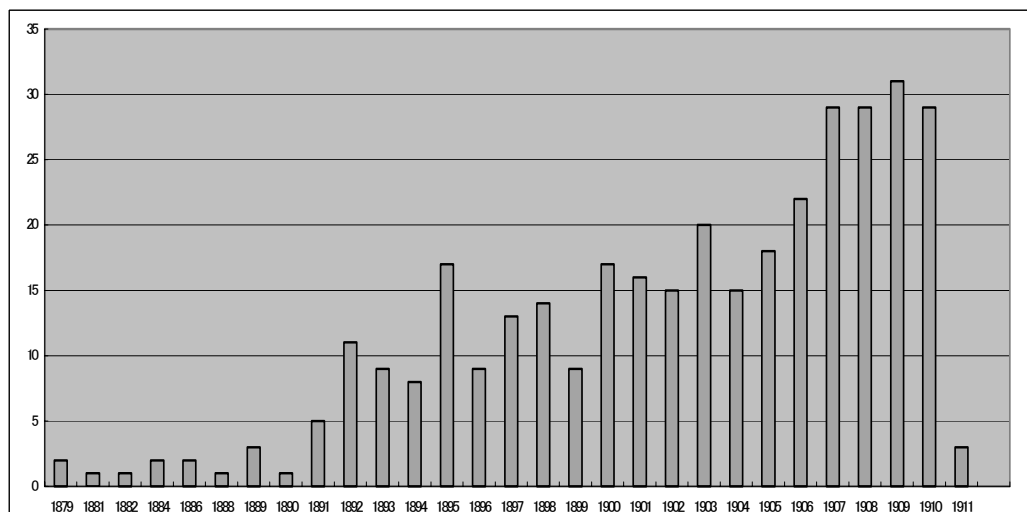
セツルメントは、前項で見たように宗教的動機、特定の社会改良的動機、個人的動機、民族間の問題解決など様々な理由で設立されたが、いずれも貧困家庭や移民家庭の家庭経営の欠陥を補い、アメリカ化を図ろうとするものであった。実際の活動は、運営者や土地柄に合わせて、図書館、夜間学校、クラブ活動、投票教育、職業訓練、スポーツ、訪問看護、ミルク配給など多岐に渡っている。

そこで次に、アメリカにおけるセツルメント全盛期の1911年に出版された*The Handbook of Settlements*¹³に収録された413セツルメント¹⁴のデータを以下に整理し、具体的なセツルメントの姿を見ていくことにする。

①設立年

セツルメントは、1890年代に入ってから急激に設立され、1907-1910年には、年間30件のペースで作られたことが図1-1から読みとれる。このようにアメリカにおけるセツルメントは、19世紀末から20世紀始めにかけて集中的に設立された。

図 1 - 1 セツルメントの設立年



②場所

セツルメントの設立された場所を州ごとに見ると、突出して多いのが、移民が当初居住したニューヨーク(91ヶ所)、次いでボストンを始めとして大学が集中していたマサチューセッツ(43ヶ所)、商工業都市シカゴを有するイリノイ(37ヶ所)、同じくフィラデルフィアを有するペンシルヴァニア(32ヶ所)、西海岸の都市を抱えたカリフォルニア(20ヶ所)であった。都市ごとにセツルメントの数を見ると、ニューヨーク73ヶ所(うちマンハッタン57、ブルックリン15、ブロンクス1)、ボストン32ヶ所、シカゴ32ヶ所、フィラデルフィア25ヶ所、バルチモア10ヶ所、サンフランシスコ9ヶ所、クリーブランド8ヶ所、バッファロー7ヶ所、ロサンジェルス6ヶ所、ケンブリッジ、ピッツバーグ、デトロイト各5ヶ所となっており、セツルメントはニューヨークのマンハッタンに集中していたことがわかる。

③セツルメント・ワーカー

資料に計上されたセツルメント・ワーカーのうち、居住女性ワーカーの数は1088人、居住男性ワーカーの数は322人で、圧倒的に女性が多かったことがわかる。男性居住者がいたのは、同じセツルメントに男女混合の居住者がいた場合に多かった。従って女性が主任管理者となっていたセツルメントが多く、男性が主任となったセツルメントは、サウス・エンド・ハウスなど、キリスト教会が設立したセツルメントに聖職者が主任となった場合に限られた。この他、セツルメントには通いのボランティア・ワーカーがおり、女性5526人、男性1418人(性別の分からないものを除く)が計上されていた。

④セツルメントでの活動内容

セツルメントの活動は、当該セツルメントの方針や、地域のニーズによって異なっていたが、多くのセツルメントでは、働く母親の便宜と子どもの健全育成を図るための幼稚園・保育園、男児向けの職業訓練として木工・金工教室、女児向けの職業訓練として縫製・刺繍教室、非行防止と仲間づくりのための各種クラブ活動、母親向けに家計や家事の合理的運営を教える家政教室や料理教室、結核予防を念頭に入れた保健・栄養活動、健全な文化・娯楽活動としての図書室や音楽教室、大人のための英語教室などの活動を行っていた。中

には、投票のための政治活動の支援や、労働運動のための労働教室などを開催するところもあったが、概してセツルメント・ワーカーは、自らの出身の中流家庭をモデルとした「健全な家庭生活」が健全な社会の基本であると考えていたために、それを移民に学ばせようとした。

表 1-1 セツルメントの活動内容

活動内容	箇所	活動内容	箇所	活動内容	箇所
幼稚園・保育園	1 8 5	少女クラブ	9 2	非行少年保護	8
日曜学校	6 5	男性クラブ	6 5	宗教的活動・礼拝	6 7
夜間学校	4 7	女性クラブ	1 2 5	職業紹介	3 1
職業訓練・他クラス	2 0 2	母親クラブ	5 3	農場・農村関係活動	4
図書室・読書室	1 9 8	縫製・刺繍	2 7 3	児童遊園	8 6
貯金・金融	9 6	料理	1 6 5	娯楽・エンタテインメント	1 2 7
スポーツ活動	1 9 5	家政・家庭経営	8 0	宿泊提供	1 6
芸術・音楽活動	1 4 1	看護・診療所	1 2 7	公衆浴場・シャワー	5 8
少年クラブ	1 1 3	家庭訪問・救済	1 2 0	その他	1 4 0

* 本表は、著者の独断で大まかに分けたものである。子どもクラブ、大人クラブなど性別が明確でないクラブは計上されていないなど、集計に限界があることをことわっておく。

(3) セツルメントおよびセツルメント・ワーカーの評価

① 社会改良の実現

セツルメントは、タウン・ミーティングによって自主的に運営されるアメリカの小さな町を都市スラムにもたらそうという理想に基づいて始められた。その多くは、中・上流家庭出身で高学歴の若い女子・男子が貧困地区に家を構え、住民を「家に招く」方式であったが、それはセツルメント・ワーカーの多くが女性であったこととも関連している。不潔で犯罪の巣窟であったスラムと一線を画するセツルメント・ハウスは、彼女らが目的を達成しながらも安全を守るために必要であった。セツルメントの仕事は、常に「住民のために」住民を変えていくことであり¹⁵、ワーカーは住民との接触を通じて自らが変わる必要はないと思っていた。

以上のような限界を持ちながらも、貧困地区に居住することによって、セツルメント・ワーカーは、自らの目で見、耳で聞いた直接経験によって住民のニーズを把握し、その結果必要な活動をセツルメントのプログラムに組み入れたり、公的に整備させる運動を展開した。例えば、幼稚園、公立学校、児童遊園、図書館などは、セツルメントで開始され、その後市に引き継がれた¹⁶。この時期には、英語も満足に話せない貧困地区の移民の主張が直接市当局を動かすことは考えられないことであり、セツルメント・ワーカーの援助なくして社会資源が貧困地区に整備されることは実質的に困難であった。母親年金、少年裁判所、児童労働の禁止、最低賃金、住宅規則¹⁷なども、セツルメント・ワーカーが貧困地区の実態を調査報告にまとめ、住民の代弁者として行政機関に働きかけたために制度化されたのである。

また住民の生活習慣や態度を変えることによって社会改良を実現しようとする試みも、一定程度の成功を見た。セツルメント・ワーカーの多くは、個人の資質よりも社会環境の

影響によって人格が発達すると考えていたため、子どもたちだけでなく大人に対しても教育的機会や文化的機会を与えた。彼らは、移民家庭の大人に対しても、英語、法律の知識、文学、音楽、生活や家事についての合理的知識の伝授などを通して感化しようと考えていた。この試みにより、子女の教育に理解を持つ移民家庭が現れ、貧困から脱却して成功する第二世代を輩出することとなった¹⁸。

② 富者と貧者の架け橋

セツルメント・ワーカーの多くは、伝統的アメリカのコミュニティをスラム地区に実現させることが、無秩序で混乱したスラム地区に社会制御(Social Control)をもたらすと考えていた。そのため、彼らは富者と貧者がコミュニティの中で有機的結合を持つコミュニティを作るべく、積極的に中・上流階級の若者をセツルメントの訪問者として歓迎し、スラムの実態を見学させ、住民と触れ合う機会を提供した。同時に、精力的に調査報告や随筆を出版し、中・上流家庭が集う大学や教会で講演を行い、自らの考えを発信し続けた。ジェーン・アダムズの*Twenty Years at Hull House*、リリアン・ウォルトの*The House on Henry Street*などの書物は、当時、多くの知識人に読まれ、後続の女性たちのフェミニスト的ロールモデルとなった。こうして中・上流家庭の女性の社会進出は、貧困地区の生活改善、移民のアメリカ化、児童保護、婦人保護などを通じて社会的な道徳向上を図ることであるという図式ができあがった。

3. 優生学ワーカー

(1) 優生学の発達

一方、大卒女性の中には、「優生学」が、人間社会の発展をもたらすと考え、優生学ワーカーとなった者も現れた。「不良な子孫の発生を防止する」という優生学の考えは、「女性の分野」である出産にかかわるものでありながら、近代的な社会の建設に寄与するものであり、大学で科学を教育された彼女らにとっては魅力的な考えであった。

優生学の起源は、19世紀のイギリスに遡る。1859年にチャールズ・ダーウィンの『種の起原』が発刊されてから、生物学としての進化論は、まもなく多くの生物学者に受け入れられた。やがてそれは、人間を含むこの世界が自然界の進化によって作られてきたという理解となり、社会に浸透していった。こうして人間の行動や社会現象を自然科学的に解釈しようとする哲学的傾向が生まれ、「自然科学主義 (scientific naturalism)」が19世紀の世界、特に知識人の間に広がり、欧米のキリスト教的世界観は、大きな変更を迫られた。

1870年代に、ダーウィンの原理を通して人間社会の発達を考える「社会ダーウィニズム」が登場し、以後、第一次世界大戦の直前まで欧米で大流行した。社会ダーウィニズムは、社会科学の分野で諸学説を生み出したのみならず、自然科学に立脚した生活改善、社会改良、公衆衛生、女性解放、社会主義などの各種社会運動を引き起こすこととなった¹⁹。

社会ダーウィニズムやそれに基づいて発達した優生学は、ヨーロッパよりむしろアメリカにおいて大きな社会的影響をもたらした。アメリカ社会は、ヨーロッパのように古い伝統を持つ社会ではなく、歴史的記憶にも新しい「人間の手によって作られた」社会である。それに加え、多種多様な移民が入植したため、思想・文化・生活習慣の上で共通基盤が確固としていなかった。こうした背景から、法律や裁判所の判断が社会的規範を形成し、それに基づく合理的解決や現実的解決が求められる傾向があった。このような社会では、人間行動や人間社会についても合理的解決を求める方向に向かうのは自然である。人間社会の合理的進化の方向を求める優生学は、まさにアメリカ的土壌の上に大きく花開いたので

あった。

やがてそれは極端な実践に結びついていく。「劣った人間の遺伝子を根絶する」という単純明快な目的のために、知的障害者、精神障害者、犯罪者、アルコール依存症患者、性病患者、売春婦、救貧院入所者などに対する断種が実践され、移民制限法が成立するようになる。第二次世界大戦中のナチス・ドイツの優生学に基づく大量の「不適合者」に対する断種実践は、大きな衝撃を世界に与えたが、そのモデルとなったのは、アメリカにおける実践であった。

(2) 優生学記録研究所と優生学ワーカー

優生学には、肯定的優生学と否定的優生学²⁰があるが、後者への関心は、19世紀末に慈善や犯罪者の更生にかかわる人々の間で高まっていた。画期となったのは、1877年の全国慈善矯正協会（The National Conference of Charities and Correction）において、ニューヨーク州ダグデイル（Dugdale, Richard L）が行った犯罪家系のジューク一族についての発表であった。これは貧困と犯罪が特定の家系で多発することを系統的に調査したものであり、優生学運動への大きな論拠となった²¹。以後、慈善事業家たちによって、次々と同種の研究発表がなされ、やがて精神障害と知的障害が貧困や犯罪の重要な増加要因であると考えられるようになった。

一方この時期、教育の分野でも優生学に関心が高まっていた。それは、公立学校の普及により、教育の効果や学級運営において支障が生じるようになっていたからである。貧困者や移民、障害者など能力の格差が大きい子どもたちが学校に通うようになると、従来の比較的均質の児童に対して行われていた教育方法が通用しなくなる。そこでニューヨーク州では、WASP的価値観に基づくアメリカ化をめざした公立学校改革の一環として、教育と環境改善によって一般社会に適應できる人間になる能力をもたない知的障害者の排除、および身体的・精神的に健全である子孫を生むことができない男女の婚姻防止を州の義務として推進することになった²²。

こうした理由から、19世紀末までにアメリカ社会では、劣悪な遺伝子を持つ家系を絶やすことを目的として、法的根拠が明確でないままに婚姻制限や去勢が行われるようになった。それに加え、外科的手術方法の進歩により精管切除術が可能になる20世紀初頭には、断種が現実的に可能となったため、断種構想が本格化した。1907年にインディアナ州で国内初の断種法が可決され、それ以後、各州で断種法が成立していった²³。

20世紀初頭には、慈善救済を社会復帰可能な適格者にのみ行う、「最適者の生存」というスペンサーの考えが一般に普及した。同時に、従来不適格者（障害児）にも施されてきた教育においても、効率的・科学的教育実践のために障害児排除が求められるようになった。こうした不適格者の選別を家系研究による科学的根拠をもって行うのが優生学の専門家の仕事であり、優生学の興隆とともに、その専門家養成が課題となっていた。

ダヴェンポート（Davenport, Charles）の優生学記録所（The Eugenics Record Office, ERO）は、まさにそのような社会的要請から設立された機関であった。1904年、ワシントンのカーネギー研究所は、人類の進化研究のために、ロング・アイランドのコールド・スプリング・ハーバーに実験進化研究所を設置した。この研究所では、進化過程の観測が行われ、2人の遺伝学者ダヴェンポートとブレイクスリーが進化の研究を行っていた。1910年、この研究所の一角にダヴェンポートがハリマン未亡人から資金援助を受けて、附属施設として優生学記録所を設置した。優生学記録所では、主として高学歴の若い女性に

一定期間の訓練を課した後、実地調査員（以後、優生学ワーカー、eugenic worker）として任命し、国内各地で多数の家系を調査させた。彼女らは、公私の知的障害者施設や精神病院をまわり、その入所者や患者の家系を調査した。またコミュニティの中で知的障害や精神障害の遺伝が疑われる家系や、アルコール依存者や貧困者の家系を調査した。ダヴェンポートがこの研究所で収集したデータは、カード記録として残され、1918年初めには、53万7千枚以上が記録されたと言われる²⁴。

優生学ワーカーとしての訓練内容は、内分泌学、メンデル理論、ダーウィン理論、統計学、断種法、知能テストの方法などの演習のほか、見学として精神病院やエリス島の移民収容施設などを回り、移民の状態を観察することであった。また、質問や面接の仕方や記録の仕方などのソーシャルワーカーの実務と類似した訓練も行われた。短期育成コースを終了した優生学ワーカーは、1917年までに156人にのぼり、アメリカ各地で記録をとり続けた。彼女らの職業的地位は、優生学記録所の所属職員ではなく、調査実費を受け取るだけの囑託職員であった。そのため、彼女らはソーシャルワーカーと兼務であったり、州の職員や囑託である場合が多かった。

（3）優生学ワーカーの評価

優生学ワーカーは、ソーシャルワーカーやセツルメント・ワーカーに比較すると、独立性が乏しく、保守的な仕事を行ったと考えられる。彼女らは、当時の最先端の遺伝学や統計学、さらに知能テストや心理学の知識を与えられたが、後者のように自らが企画した活動を行ったわけではなく、ダヴェンポートの指示に従った調査しか行うことを許されなかった。ダヴェンポートは、人間の社会的行動の遺伝に主な関心を持ち、肉体的、生理学的、心理学的、個人的、社会的特徴の5つの特徴に限定して客観的記録をとるよう優生学ワーカーに求めた。彼がワーカーに要求したのは、「自ら判断しない」ことであり、分析は彼のみが行うことを徹底させた²⁵。その意味では、優生学ワーカーは、セツルメント・ワーカーと異なり、機械の歯車のように客観的で性格な仕事をしたダヴェンポートの優秀な助手であったと言える。

優生学ワーカーが、ダヴェンポートの指揮下にある半専門職としての地位や、生活給として十分ではない給与に甘んじることができたのは、彼女らが当時最先端の科学的知識を与えられ、アメリカ社会の発展に寄与していると自負できたからであった。また、彼女らの研究対象である貧困者、障害者、移民などは、WASP中流階層である彼女らの優越感を満足させたことも仕事を継続できた原因である。

セツルメント・ワーカーがしばしば自己矛盾に陥ったのに対して、優生学ワーカーは、出自とその社会的活動に矛盾をきたすことがなかった²⁶。すなわち、セツルメント・ワーカーは、男性と競争することもできるような専門性や自立性を追求しながら、女性の分野である児童、家庭、女性、家事、教育、保健に関連する分野から出ることができなかった。また多様性や平等性を大切にしつつ、自らの中流的ライフスタイルは捨てることができなかった。しかし優生学ワーカーは、貧困者や障害者と共通基盤を築く必要もなく、ヒューマニズムと自らの生活スタイルの矛盾に悩むこともなかった。彼女らは、劣悪な遺伝的性質を持つ人類の切り捨てのために記録の集積に熱心に取り組み、自らの出身母体である優良な人類の温存に寄与していると信じていることができたのである。

いずれにせよ、20世紀初頭の高学歴女性は、職業人としての自覚と能力を有しつつも、未だ男性優位であった社会通念に阻まれ、「女性としての専門職・半専門職」に活路を見出

さざるを得なかったのであり、一見形や方向が違えども、女性が補助的専門職であり、男性との差別的給与や労働条件を忍耐しなければならなかった。それは、彼女ら自身の中にも、女性の責任で良い家庭を築くという意識から開放されない部分が存在していたからである。

¹ Wilma Mankiller and others eds., *The Reader's Companion to U.S. Women's History*. New York, NY: Houghton Mifflin Company, 1998. pp.163-166.

² Ibid. pp.642-644.

³ ブリン・モーは、最も革新的で、男子と同等の教育を約束していた。

⁴ 大学セツルメント協会は、イギリスの社会改良家に刺激されたヴァイダ・スカッターが、1885年スミス女子大学同窓会に出席した際、ヘレン・ランドとジーン・ファインとセツルメントの設立を話し合ったことに始まる。その2年後に彼女らは協会を発足させた。

⁵ Rousmaniere, John P. "Cultural Hybrid in the Slums: The College Woman and the Settlement House, 1889-1894." *American Quarterly*(22-1)1970. p.46.

⁶ Barbuto. pp.50-51.コイトは、わずか2年ほどでこの活動を止め、イギリスの倫理文化協会の招聘に応じて英国国教会の枠内での改革に着手すべくニューヨークをと去った。コイトが去った後、隣人組合はその活動を継続することが困難となったが、後継者ストーヴァーやキングの努力で、1891年大学セツルメント (University Settlement) として再出発することとなった。

⁷ 社会福音運動は、その目的達成の手段において様々な派に分けられる。例えば、社会キリスト教徒は、社会全体の改革を求めるキリスト教社会主義者に対して、より小さな範囲での改良を求めた。しかし社会福音運動を支持する者たちは、一般的に労働運動を支持し、税改革、独占禁止、行政が経済に介入することを求めた。また彼らは、マシーンによるボス政治に反対し、上院議員の直接選挙を始めとして民主的政治改革を求めた。

⁸ Woods and Kennedy. p.46.

⁹ 1895年に出版されたHull-House Maps and Papersは特に有名である。

¹⁰ Balbuto. pp.99-100.

¹¹ Balbuto. pp.156-157. Woods and Kennedy. p.48.

¹² Balbuto. pp.224-225.

¹³ Woods, Robert A. and Kennedy, Albert J. eds.

¹⁴ データとしてほとんど掲載がなく、名称のみのものも含むため、統計処理に用いることができなかつたものもある。

¹⁵ Gans, Herbert J., "The Settlement Role: Past and Present." Lubove, Roy eds., *Poverty and Social Welfare in the United States*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1972. p.56.

¹⁶ *Handbook of Settlements*にリストアップされているセツルメントの活動内容にも、もはや市当局に委譲されたと記された活動が相当数あった。

¹⁷ 但し、住宅改良については、実際の建て替えが一時的にでも住民の住処を奪うことになり、建て替え後の家賃上昇を免れないものであったため、住民の賛同が得られなかつた。またセツルメント・ワーカーが期待したほど良心的な大家もいなかつたために、成功しなかつた。

¹⁸ 例えば、ハイラム・ハウスに通っていた16歳のロシア系ユダヤ人マニュエル・リーヴァインは、セツルメント主任管理者のジョージ・ベラミィの個人教授のおかげで法律学校に入学し、後に市の裁判官に任命され、ハイラム・ハウスのボランティアとなった。

¹⁹ 米本昌平他著『優生学と人間社会』講談社現代新書，2000年。pp.14-17。

²⁰ 優良な遺伝子の増強を目指す肯定的優生学 (positive eugenics) に対して、劣悪な遺伝子の除去を目指す優生学を否定的優生学 (negative eugenics) という。たとえば、赤ちゃんコンテストや健康優良児の表彰などは肯定的優生学によるものであり、知的障害者やハンセン病患者の結婚の禁止や断種は否定的優生学によるものである。

²¹ 中村満紀男他著『優生学と障害者』明石書店，2004年。P.75。

²² 中村前掲書p.81。

²³ 1909-1913年には、16州で成立、1923年には32州で成立している。

²⁴ 米本前掲書,pp.30-34。

²⁵ しかしダヴェンポートの収集した記録の多くは、今日から見れば不完全なものであり、遺伝形質の記録として有効であるとは言えないものが大量にある。例えば、同じ職業（海軍軍人など）の者が同一家系から多数出ることなどは、遺伝ではなく環境要因によるものであると考えられるからである。

²⁶ Daylanne K. English, *Unnatural Selections*. Chapel Hill. NC: University of North Carolina Press, 2004.